トに乗れる機会も多いというイギリスの子どもは、幸せだと思う。

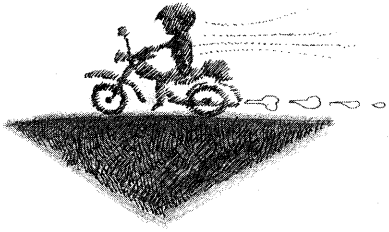
北の国で　風になる

上原　那奈世
（十文字学園女子短期大学）

この夏休み、北海道の登別温泉で開かれる組合の幼児教育研修会の誘いを受けた途端、不謹慎にも私の心は四十代に残したツーリングコース「襟裳岬～霧多布」に飛んでいました。

北海道一週の夢は、十数年前からのマイカーによる何回かのドライブの度に少しずつ脹らんでいきました。そして、或る年の幼稚園の七夕祭りの折り「先生も書いて」と子供達が持ってきてくれた短冊に「四十五歳までに、バイクで北海道一週旅行」と書いて「馬鹿だなぁ先生死んじゃうよ」と担任や子供たちに冷やかされたこともありました。

それがどうしてもと思うようになったのは、ポンコツ車で宗谷岬に向かう海岸線を走っている時のこ



とでした。トコトコ走る中年ペア（といっても私よりずっと若い）に出会ってからです。助手席から身を乗り出して、振り返りざまカメラを向けると、笑顔で手を振って応えてくれました。大型に乗ったその男性が小型車（125cc）の女性を庇うように走っていましたが、何よりも私を感激させたのは、追い越し際に読み取ったナンバープレートが「出雲」だったからです。

あれから八年、今でこそ日本中のみつばち族がブンブンと、自家用車を追い越して行く時代になってしまいましたが、あの時の何とも長閑な光景は、北海道の観光地化と共に道路状況がどんなに変わろうと、私自身のツーリングの原点となったようです。

とはいっても「一人じゃ心細い」免許は有っても「原付しか乗ったことない」「本州縦断はしんどい」かといって「カーフェリーじゃ懲り懲り」だし、という訳でいざ決行となると幾つかの壁がありました。

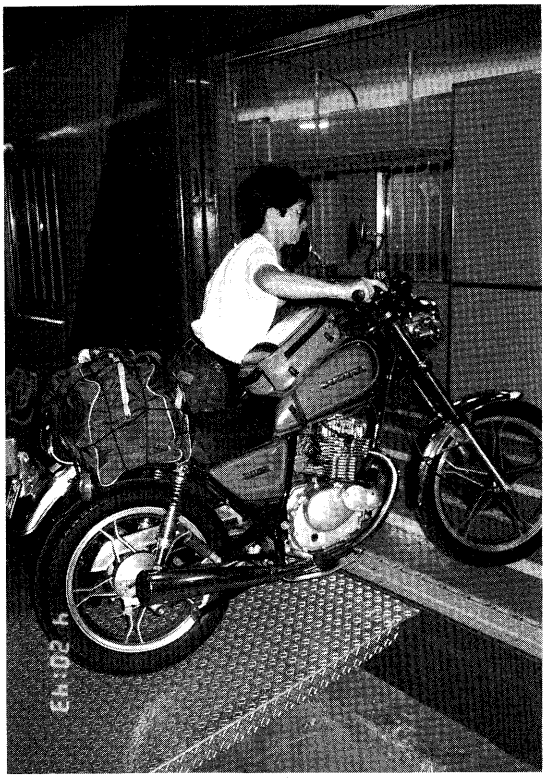
「願っていれば叶えられる。出来るか出来ないかでなく、そのことをやりたいか、やりたくないかで決まる。」というのは私の生活信条でしたが、ラッキーにも、○免許取り立ての同志?との出逢い、○モトトレーンの出現（上野、函館間のバイクとライダー専用列車）、こうなれば、残された問題は、○体力と短足に合った自動二輪を手に入れること、だけでした。

その後は八ケ岳・裏磐梯へと長距離に挑戦して、排気ガスと信号だらけの本州の道路にうんざりし、益々北海道への思いを募らせたものでした。

一九八五年八月十七日、モトトレーンのキャッチフレーズ「あした北の国で風になる」を見て寝台車に乗り込みました。第一回目のコース函館～雷電海岸～札幌は海岸線が多く、その上連日雨に祟られ、海からの風雨に横倒しにされそうな寒さに震えるつ

らい旅でした。そのおかげで、日毎に知恵が付き、ブーツの上には大きなポリ袋を履き、皮の手袋の上には更にビニールの薄い手袋を重ね、防寒のため着られるだけ身につけて「北の国で風になる」どころか「達磨さんに」なって走り続けたものでした。

翌年は、心ゆく迄「長いコース走りたい」の願いから宗谷まで足をのばし、更に利尻島へと欲張った計画を立て、万全の装備で出発をし、旭川～宗谷までのコースは今迄願っていたツーリングの醍醐味を体験することができました。緑の地平線、青い空、退屈凌ぎに偶に走っているダンプに追越しをかける



▲「上野発急行列車・モトトレーンに愛車を積み込んで」
体力のない者にとっては、貨車に積み込むだけでも重労働でした。

他は、60km／hのまさにトコトコ走行でした。時折Vサインを出し突風のように走り抜けるヤングの軍団に、「あぁもったいなーい」などとおとなしい「風」ぶりでありました。

そして五十歳の今年、願ってもないチャンスに恵まれ、相棒を誘惑し（出張旅費は山分けという条件付）二泊三日の研修会場を後にしました。三回目のコースは全行程（一週間）快晴に恵まれたこともあって、思い出す度にさわやかな風が私の心を吹きぬけます。

☆　警笛ひとつ鳴らさず、気が付いて道路端に寄せるまで静かについて来る車、心細くなった頃交わすライダーとの笑顔のVサイン、「頑張れ！」の合図に喘ぎながらも日焼けした腕を青空に突き上げて、拳で応えてくれる自転車族、やっと辿り着いたライダー専用の宿ではオーナーの生き方を感じさせてくれる家庭的なムード。大自然の中では人はみなやさしくなれるのでしょうか。

☆　車に跨がった後はノンストップの独りの世界、前後に一台の車もなく何処までも続く直線道路、全身に感ずる牧場の匂い、思わずアクセルが弛んでしまう壮大な景色、時折飛んでくる虫達のつぶて……。

そんな全てが、私を「風」にしてくれました。

それは、たとえどんなに東京で自由に走り回ることがあろうと、手に入れることの出来ない、北国のくれた贈り物でした。

（港区立南海幼稚園）